

平和図書

捕虜収容所・抑留所事典

—日本国内編—

捕虜の寝棚、終戦直後
(富山・伏木海陸運送収容所・
米国立公文書館蔵)

タブー視されたテーマに切り込み、
戦争の新しい事実を掘り起こした画期的労作

捕虜収容所・抑留所事典編集委員会編

●編集委員 内海愛子・小宮まゆみ・佐久間美羊・
笹本妙子・高田ミネ・福永徳善

●B5判・上製・816頁

●定価(21,000円+税)分売不可
ISBN:978-4-86369-741-6

株式会社 すいれん舎

1 日本全国の連合軍捕虜収容所と民間人抑留所をすべて網羅

日本国内に存在した130か所の連合軍捕虜収容所と29か所の民間人抑留所をすべて網羅、収録した。

2 捕虜収容所・抑留所ごとの詳細な事実の記録

どこの国の捕虜が何人きて、どんな生活を送ったのか。何人亡くなり、何人帰国できたのか、捕虜収容所や抑留所はどこにあったのか。横浜軍事裁判で裁かれた収容所関係の日本人はどのような理由でいかなる裁きを受けたのか。それらの事実をGHQの公文書をベースに、捕虜の手記、地元での記録、本人や関係者からの聞き取りなど多種多様な資料、情報源から事実を一つひとつ掘り起こした詳細な記録。

3 各施設跡を訪問できるような地図を収録

各収容所、抑留所のトップページに施設跡と目印になるものを示す詳細な地図を収録し、読者が捕虜収容所や抑留所施設跡を訪問できるように努めた。

4 1部で捕虜問題全般、捕虜収容所、民間人抑留所についての概説を記した

捕虜問題全般、とりわけ日本が抱えてた問題等について丁寧に執筆していただいた。捕虜収容所、民間人抑留所の概説のほか、捕虜を輸送した輸送船、撃墜された連合軍飛行機の捕虜などについての論考も収録した。

5 出典・参考文献を巻末に収容所・抑留所ごとに記載

各捕虜収容所や抑留所ごとに出版・参考文献を記載し、出版参考文献だけで100頁に及ぶ。

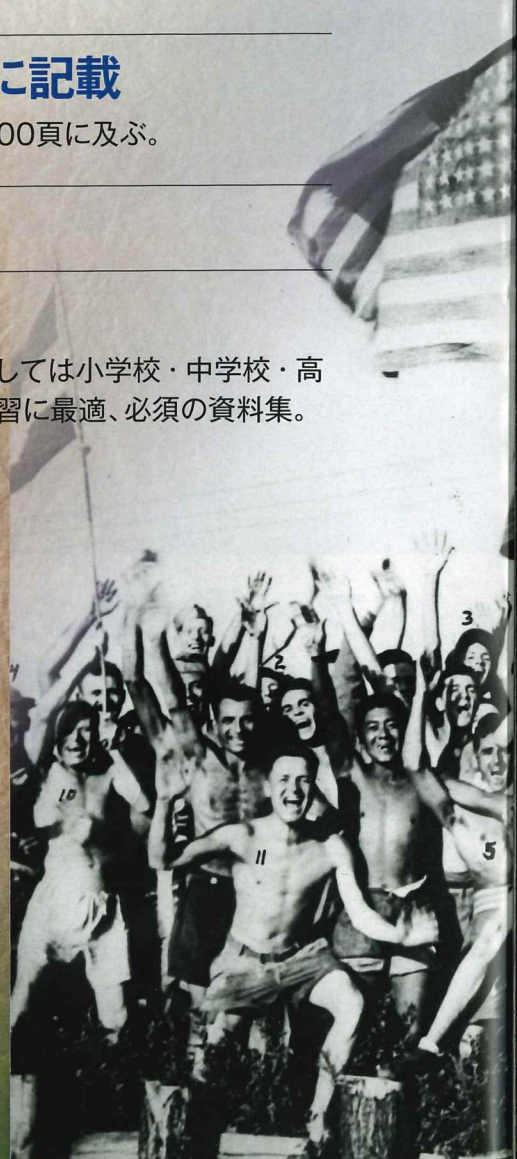
6 事項索引、人名索引を巻末に付した

7 近現代史の探求学習に最適の資料集

現在大学以下、すべての教育段階で探求学習重視に移行。需要がある科目としては小学校・中学校・高校の総合学習「総合的な学習(探求)の時間」。地域、郷土の近現代史の探求学習に最適、必須の資料集。



捕虜が描いた収容所 (広島・因島収容所 / Wade)



1945.8.30、上陸用舟艇を迎え歓呼する捕虜 (東京・大森収)

東京俘虜収容所第14分所(東芝鶴見)

空襲で2回も焼失、捕虜31人が犠牲に



病院船に運び込まれた捕虜の患者
(品川捕虜病院・米国立公文書館蔵)




米国立公文書館蔵

収容所の位置

この収容所の場所は4か所変わった。いずれも横浜市鶴見区内。

- ① 北緯35度29分42秒、東経139度40分45秒。
- ② 北緯35度30分51秒、東経139度41分36秒(推定)。
- ③ 北緯35度29分15秒、東経139度41分55秒(推定)。
- ④ 北緯35度30分23秒、東経139度40分25秒。

①は末広町1-12-4の鶴見造船の収容所(神奈川県、)内。②は平安町1丁目253番地にあったが空襲で焼失。③は末広町2-4の東芝鶴見工場内にあったが空襲で焼失。④は総持寺山門近くの鶴見町2で、ここで終戦を迎えた(資料1)。

捕虜の使役事業所・組織

東京芝浦電気鶴見工場。

収容人員と死者

終戦時収容人員121人(蘭72、豪17、英20、米12)、収容中の死者44人(蘭32、豪10、英2)。

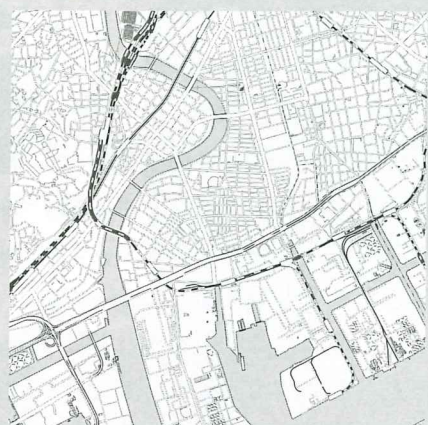
開設から閉鎖まで

- 1943.12.25 東京俘虜収容所第11派遣所として①の鶴見造船の収容所内に開設。英米捕虜約30人が到着。
- 1944.1 ②の平安町に移転。

捕虜の生活と労働

(1) 捕虜の構成


最初に入所した英米捕虜約30人の詳細は不明である。1944年9月11日に収容された蘭捕虜はジャワで捕虜となり、泰緬鉄道で使役された後、「羅津



1944.9.11 蘭捕虜約100人到着。

1944.9末 豪捕虜約50人到着

1945.4.15 空襲で収容所②が焼失し、捕虜1人が死亡。③の東芝鶴見工場内に移転。



1945.6ごろ 豪捕虜25人が新潟鉄工の収容所(新潟県、)に移送。

1945.7.13 空襲で収容所③が全壊し、捕虜30人が死亡。

1945.7.28 ④の鶴見町に移転。

1945.8 東京俘虜収容所第14分所と改称。

1945.8.15 ポツダム宣言受諾が発表され戦争終結。

1945.8.30 川崎埠頭にて米海軍の名・スタッセン(つづり)中佐に捕虜引き渡し。

丸」で日本に送られたが(1944.9.8、門司着)、航海に2か月もかかり、航海中に多数が病気になる。豪捕虜50人もジャワで捕虜となり、同じく泰緬鉄道で使役された後、1944年9月6日にシンガポールから「楽洋丸」で日本に向かったが、9月12日、中国海南島沖で米潜水艦の雷撃により沈没し、救



捕虜の点呼(東京・品川→大森収容所・八藤雄一提供)



終戦直後の捕虜たちの食事風景
(宮城県細倉鉾山収容所・米国立公文書館蔵)

笹本妙子 (POW研究会共同代表)

POW (Prisoner of War = 戦争捕虜) 研究会が発したしたのは2002年である。集まったのは何らかのきっかけで連合軍捕虜の存在を知り、関心を持った人たちだった。それまで私たちは、あのアジア太平洋戦争に関し、空襲や原爆などの被害については学校で教えられてきたが、日本軍が占領地で13~14万人もの連合軍兵士を捕虜としたことも、そのうち約3万6千人を日本に連れてきて働かせたことも、敵国民間人が抑留されたことも、おびたしい犠牲者を出したことも全く知らなかった。

この埋もれた歴史を掘り起こすことが私たちの目標だった。捕虜関係の書類は終戦直後に日本軍によって焼却されたため、日本側の公文書は極めて少なく、あっても入手が困難で、多くをアメリカ国立公文書館などの海外資料に頼らざるを得なかったが、調査を重ねていくうちに、日本側の資料も少しずつ入手できるようになった。また、元捕虜や日本人関係者への聴き取りも積極的に行ってきた。

調査を進める中で私たちが痛切に感じたのは、この問題の根の深さであった。過酷な捕虜生活の中で命を落とした人々だけでなく、生きて故国に帰った人々も心と体に深い傷を負い、日本への強い怒りと憎しみを抱きながら戦後の日々を生きてきた。その傷は子や孫へと受け継がれている。一方、日本人の側にも大きな傷を残した。必ずしも公正とは言えない戦犯裁判で、多数の日本人が捕虜虐待の罪で裁かれ、絞首刑などの厳罰に処された人も多い。残された遺族は戦犯の汚名を背負いながら、生活苦と闘わなければならなかった。捕虜の問題は、あの大きな戦争の中では小さな一断面に過ぎないかもしれない

が、戦後70数年を経た今も癒えない傷に苦しんでいる人が大勢いるのである。

捕虜問題は原爆投下とも無縁ではない。広島に原爆が投下された後の1945年8月8日、トルーマン米大統領は、ポツダム会談の報告をラジオ放送する中でこう語っている——「日本は予告なしにパールハーバーでわれわれを攻撃した。米人捕虜を殴打し、餓死させ、処刑した。日本の戦争遂行能力を完全に破壊するまで原爆を引き続き使う」。原爆の投下は東西の冷戦につながる核開発競争によるものではあったが、捕虜問題を投下の口実としたのである。元捕虜の多くは、原爆投下によって自分たちの命が救われたと考えている。被爆死した捕虜がいるにも関わらず。今、ウクライナでの長引く戦争を見るにつけ、同じことが繰り返されないかとの恐怖が募る。

2016年、私たちはこれまでの調査研究成果の出版プロジェクトを立ち上げ、すいれん舎の高橋さんの助言を受けて『事典』としてまとめることにした。まずは自分たちの足元にあった日本国内130か所の捕虜収容所と20数か所の民間人抑留所について、それぞれの実態を捕虜側、日本人側双方の視点から、できるだけ正確に客観的に記述することに努めた。

これらの収容所や抑留所は日本の津々浦々にあったにも関わらず、地元の人にすらほとんど知られていない。存在したのは長い所でも3年半、短い所では1カ月にも満たなかったが、その中で何があったのか、どれほど苦しんだ人々がいたのか、郷土の歴史としてぜひ知ってほしい。そして、もたらした傷の大きさと深さを知り、戦争と平和を考えるための材料としてほしい。これが私たちの願いである。

株式会社 すいれん舎

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-14第二万水ビル5B
TEL. 03-5259-6060 FAX. 03-5259-6070 E-mail masato@suirensa.jp

ご購入はお近くの書店、もしくはFAX 03-5259-6070へ

捕虜収容所・抑留所事典 —日本国内編—

●定価 (21,000円)+税 ISBN:978-4-86369-741-6

冊

番線印(書店用)

所属先

お名前

返品条件付